書評

仲田庸幸博士著『平安朝文学の文芸的研究』

伊井春樹

博士の前著『源氏物語の文芸的研究』が出版されたのは、昭和三十七年九月だった。そこで博士は持論である源氏物語研究における「非連続の連続」の文芸観の全貌を体系的に示され、多くの問題を意欲的に分析し、その方法による文芸的意義の成果を鮮かに展開された。それから五年、今度は『平安朝文学の文芸的研究』を公刊することによって、単に源氏物語ばかりではなく、他の作品の研究にもその方法を応用し、先に提唱した文芸論の普遍性をも実証された。そういう意味で両著書は不可分の関係にあり、またこれによって博士の文芸観の発展的経過と空間的広がりとを跡付けることができると思う。

私に与えられた書評という重き負担に耐えるため、以下内容の紹介と読後感を述べることによって、その責めを果したい、廼この書に対して既に上坂信男氏による書評のあることを付言しておく（「国語と国文学」昭和四十二年八月号）。

内容は前編（十章）と後編（五章）に分たれ全十五章、源氏物語の文芸的意義の究明を中心としながら、それと深い関連を持つ蜻蛉日記・枕草子・徒然草を一元的に研究されたものである。まず全体を概観できるよう、章の項目だけあげてみよう。

（前編）第一章源氏物語の暗さの文芸的意義　第二章再び「源氏物語の孤独観の文芸的意義」について　第三章源氏物語における「ひとわらへ」の文芸的意義　第四章源氏物語の妻の座の研究　第五章源氏物語の幻想性の文芸的意義　第六章源氏物語の自然観と詩情　第七章源氏物語の場面性の文芸的意義　第八章源氏物語の構想と若菜巻の文芸的意義　第九章匂宮・紅梅・竹河の三巻の問題点と文芸的意義　第十章紫式部の心境の矛盾と文芸　（後編）第十一章蜻蛉日記に見る愛情の特質　第十二章枕草子の明るさの一考察　第十三章枕草子の愛情の文芸的意義　第十四章徒然草に見る女性観の特質　第十五章徒然草の道の王朝性と中世性

このように並べてみると、数多くの問題を内包している源氏物語の多様性を今更ながら認識させられると共に、それらの問題を一つ一つ真摯に追究された博士の姿が偲ばれてくる。設定されたいずれの研究題目を取上げてみても、源氏物語の文芸性の本質に通るには、重要で不可欠なものばかりである。その中にあって、特に私の個人的興味と感興をそそられた数編について、少しく述べてみたい。

第三章の孤独観の問題に再度立向かわれた直接の機縁は、森岡博

士の前著に対する書評（「国語と国文学」昭和三十八年二月号）に応えることにあった。源氏物語の孤独観の追究において、日記や家集は第二義的な参考意見とするのに対する反論と、同じく森岡博士が要望された物語そのものに見られる孤独観とを考究されたものだ。博士にとって、文芸観乃至は物語観の根低をなすものは、度々引用される「人生いかに生くべくか」の、人間誰しも当面せざるを得ない主観的内在的な問題を、単なる個人の問題としてではなく、感情を超越して吐露された、その外在的なるものの中に文芸性の本質を把握しようとする立場である。このことに関して、森岡博士や上坂氏が生活理論と文芸理論とを分離すべきことを提起されたが、博士にとってそれは本質的に不可分の関係にあり、内なるものと外なるものとの非連続の連続関係にあるとの認識のされ方かと思う。

この孤独観の問題も、そういう立場に還元させてこそ理解できるものであろう。それはまた博士の単に源氏物語に限らず、人間観乃至は人生観とも連関する問題である。この論稿を発表した後、博士は人間の孤独を重要なモチーフとして書いた小説『星はさびしく』（青葉書房昭和三十九年五月刊）を出版された。ここにその「あとがき」の一部を引用することによって、私の贅言に換えさせていただくことにする。

わたくしは、最近、源氏物語の孤独観についての論文を書きあげた。（中略）そして、作者紫式部が、どんなにさびしい人であったか、源氏物語には平安朝の人々が悩み多く生きてゆき、人生が意のごとくならないためにいかに孤独感に陥っていったか等について、いかに文芸性豊かに書いたかを、しみじみ味わった。それは、只今の若い人々や年輩の人々の悩みとも共通する点が非常に多い。古典は、古くて古びないものである。それぞれの運命の星を背負って、それぞれにさびしく生きてゆくのが、古今東西を通じての人生の真の相であるかも知れない。本書の「星はさびしく」という題は、只今の若い人々を中心としての「人生いかに生くべきか」を描き出した内容を象徴したつもりだが、背後にはこのようないきさつもあったのである。

第三章では物語に現われる「ひとわらへ」という字眼を拠点として、文芸性の本質を追究されようとする。最も興味のあるのは、この語の使用された様相であろう。正編の得意時代（桐壺―花宴）には一例もなく、中年期（澪標―藤裏葉）以降に見られるというのだ。それについて「一般的に言えば上昇的積極的自己認識に立つ限り「ひとわらへ」を怖れる心境にはならず、下降的消極的自己認識に陥って、はじめてその苦悩がわく」と説明されている。更にその語を分析することによって、中年期の「ひとわらへ」には、猶どこかに光明の通路が感じられるが、晩年期（若菜上―竹河）のそれは悲劇的な色を帯びていると指摘される。また宇治十帖では、ほのかに崩す中世的浄土教的光の中に、「ひとわらへ」の苦悩の過程と超克の描写を見出すとする。こうなるとこの語は、単に語学的分析の範疇に存するのではなく、源氏物語全存在の構想や時代思潮の繋がりにまで発展する。それが文芸学の在り方でもあろう。貴重な研究方法の提示でもあったと思う。

第七章の場面性の文芸的意義は、絵巻物的な場面を指すのではなく、構想単位のテーマを絵画化した場合、当然予想されるとする場面性の謂である。四部説・三部説或は起承転結説など、各構想論に

おける基本パートの場面を一つずつ抽出して検討を加えている。これは博士の基本的な源氏物語観の姿勢とも関連する問題であろう。さてその場面とは、四部説では青年期（雨夜の品定め）、中年期（藤裏葉の夕霧と雲居雁の結婚）、晩年期（紫上の死）、宇治十帖（浮舟再生）といったものである。三部説との違いは、中の二つが無くてかわりに、第二部で若菜上の柏木が女三宮を垣間見る場面をあげる。

ここで問題となるのは、四部説における晩年期の場面設定であろう。博士も断っておられるように、初め紀要に発表された時は紫上の死ではなく、若菜上の柏木の垣間見を一応として当てておられた。そして「柏木が女三宮を垣間見るというのは、女三の宮の降嫁とそれによって孤独感に陥った紫の上の光源氏に対する妻の座及び愛憎の域を越えて仏教的傾斜に立ったことや、柏木の悶死や女三の宮の薫を生んで後の出家や女三の宮も紫の上も失って光源氏の寂寥孤独に陥る因等がすべてそれに因しているからである。」と説明されていた。しかし本書に収録される際には「柏木の垣間見は光源氏の晩年を暗く憂愁に閉ざす因にはなるが、彼自身の晩年の山を示すものではない。（中略）また、垣間見それ自身は、光源氏とは直接関係のないことであり、その場面も少しも晩年らしいものでもない。」と、前説を訂正し、紫上の死をその場面として持って来られた。博士の光源氏による統一的立場からの晩年期を重視される説においては、それは当然でもあろう。が、私にとっては、やはり前説も全く捨てがたい気がする。これまで諸家によってなされた第二部の数多くの論は、いずれも柏木と女三宮の関係に集約されている。というのは、それだけ源氏物語全体から言っても、多くの問題を内包している巻であり人物だからであろう。柏木の垣間見でなくても、女三宮の降嫁の儀式を場面化することによって、光源氏晩年の表面の栄花と平穏さの中に、以後起り来る秘めたる人間的苦悩と暗鬱なる姿を象徴してもよいような気がする。ともあれ、晩年期の重要なモチーフは、女三宮の降嫁が因であり、紫上の死が果であろう。どちらも必要不可欠で、等価値的な場面とならざるを得ないようにも思う。しかし一構想一場面を一元的に追究され、より重要な場面を採られた博士の立場からは、私のこの考えは無理な注文というほかはない。

以下まだ第一章の「暗さ」、一度発表した後、十数年も温められ増補された第四章の「妻の座の研究」、第八章の若菜巻の意義、更に後編では第十一章の蜻蛉日記の愛情、その他枕草子の論稿など述べたい点は多い。しかし一部は既に上坂氏が書かれていることであり、また紙幅の都合上もあってすべて割愛する。

全篇通読して言えることは、問題追究に真摯であること、更に問題に応じた研究方法を遂行されていることなど、私達後学の益するところ大であることは今更多言を要しないであろう。平安文学に関する純粋文芸学的研究論稿の少ない昨今、研究史上貴重な成果を手にし得たことを喜びとしたい。

私の浅学によって、読解上或は重大な誤りを犯しているかも知れないことを怖れる。私の恩師として、また学者として敬慕する博士の御論稿を常々読ませていただきながら、述べることの少なきをお詫び申しあげる。今後とも文芸論の体系化を一層押し進めていただけることを、切に望む次第である。（昭和四十二年一月三十一日刊、A5判五三八ページ　四三〇〇円　風間書房）